

論文審査の結果の要旨

論文提出者 二瓶マリ子

論文題目「スペイン植民地支配末期のテキサス境界社会（1790～1810年）——ルイジアナ住民受入政策を中心に」

本論文は、当時スペイン植民地メキシコの一地方であったテキサス地方の東部において、隣接するルイジアナとの境界に成立した特徴ある社会のなりたちを、主にスペイン植民地当局が残したスペイン語文書に基づいて、無名の人々のプロフィールとライフ・ヒストリーの再構成を通じて解明することを企てた研究である。とりわけ、アメリカ合衆国によるルイジアナ購入（1803年）後にテキサス振興をめざしてスペイン当局が展開したルイジアナ住民受入政策と、それに応募した人々に力点をおく。その過程で浮かびあがったのは、ルイジアナ購入前後の20年間にテキサス東部の社会がその境界的性格をいちだんと濃くしたということである。住民の民族構成が多様性を増し、密輸など不法行為を含む経済活動も活発化し、内陸のチワワ市にあった上位の統括機関に対するテキサス現地官僚の独立性も増した。

本論文は序章・終章を含めて全8章から構成され、本文A4判247ページ、「参考付表・史料」51ページ、「文献目録」14ページから成る。序章において使用した史料を説明し先行研究を検討したのち、第1章「植民地支配テキサスの概要」では、最初の布教区が作られた1680年以來のスペイン植民地テキサスの発展を概観し、アメリカ合衆国のルイジアナ購入以降を「植民地時代末期」と時代区分したうえで、テキサスの地理、スペイン統治体制、ヨーロッパ系人口とその構成、奥地の先住民集団について基礎的な情報を確認する。東に隣接するルイジアナが17世紀末にフランス植民地となったことに対抗してスペインがメキシコの辺境にあたるテキサスに植民し、その後ルイジアナは1763～1803年の間スペイン領となったが、1783年にアメリカ合衆国が独立して以降そのルイジアナへの影響力が徐々に強まり、ルイジアナ購入以降はいちだんと緊張が高まったことが確認される。

第2章「植民地時代末期テキサスの人口構成——1793年レビジャヒヘッド人口調査を中心に」においては、ルイジアナ購入以前のテキサス住民の人口構成とその地域差を検討する。史料はメキシコ副王レビジャヒヘッドが実施した人口調査である。これはスペイン領メキシコにおいて初めて実施された本格的な人口調査であり、世帯主だけでなく家族構成員の情報を収集している。テキサスでは西部のサン・アントニオ、東部のナコドーチスと、境界領域のバイユー・ピエールの三地域で実施された。この史料を検討した結果、三地域はそれぞれ異なった民族的・人口的・社会経済的特性を持つことがわかった。サン・アン

トニオから東へ行くほど非スペイン臣民および非スペイン領出身の世帯主男性が増え、世帯主男性の年齢が低く、独身者が多いことがわかった。この結果に基づいて著者は論文表題にある「境界社会」を、サン・アントニオを含まず、ナコードーチス以東の特性を有する社会であるとあらためて定義する。これら三つの集団の特性を目安とし、それと比較することで、以下の章において、テキサスへの移住を申請したルイジアナ住民の集団や、ルイジアナ購入後の時期のいくつかの住民リストにみられる集団の特性を明らかにすることをめざす。

第3章ではルイジアナ購入以前に、アメリカ合衆国からルイジアナを經由してテキサスに浸透を図った個人の代表例としてフィリップ・ノーランをとりあげる。かれはケンタッキーを根拠地とする冒険商人であり、1790～1801年の時期に三度にわたり、大規模な武装隊商を率いて越境し、ルイジアナ・テキサスで主に先住民から馬を買いつけ、最終的にはスペイン当局から反乱謀議の疑いをかけられて捕縛・処刑された。ノーランは、この時期にルイジアナ・テキサス間を越境しつつ様々な活動を行っていた境界社会の構成員のうちで、そのプロフィールや活動の中身について最も詳しい情報が得られる人物であり、以下で検討される境界社会構成員たちの原型もしくは先駆けとして詳しい検討に値する。ノーランの武装隊商は若年の独身男性から成り、スペイン側に安全保障上の脅威感を与えるほど大規模なものであった。先住民と商取引する上でのスペイン人の能力は低く、ノーランはそこに経済機会を見いだした。境界社会におけるジェンダー関係や法の支配についてもノーランの挿話からはさまざまな情報が得られることが示された。

第4章では、テキサスを取り巻く国際環境についてのスペイン植民地当局の認識に注意しつつ、ルイジアナ住民受入政策の策定および施行の過程を三期に分けて考察する。ルイジアナ購入直後、スペイン当局とアメリカ側出先機関との関係は境界線確定問題をめぐって緊張し、その後中立地帯を設ける合意ができたことで一時緩和するものの、ナポレオンのスペイン侵入という異常事態を迎えて再度緊張が高まった。この間にルイジアナ住民側からテキサス総督に対し、ルイジアナがアメリカ領になったのでテキサスに移住したいとの申し出があり、テキサス総督がチワワ総司令官に指示を仰いだところ、総司令官は、移住希望者全員について自分が移住の可否を審査するから、ひとりひとりに身上書を出させてチワワへ送れ、と命じた。この結果テキサス総督府には、この時代のテキサス境界社会住民という社会集団の特性をかなりの程度反映するとみられるルイジアナからの移住申請者というサンプルについて、プロフィールとライフ・ヒストリーに関わる豊富な情報が残されることとなった。

第一期、第二期を通じて集団移住計画がいくつか提案されたが、チワワの総司令官は個別審査の方針を貫いた。第二期にはナコードーチスとサン・アントニオの間に、ルイジアナ移民を住民とする新しい町トリニダ・デ・サルセドが設けられるなど新展開があった。第

三期に入るとチワワの総司令官はルイジアナ住民の受け入れを全面的に停止するとの命令を下したが、テキサス総督府の官僚たちはこれを不服として本国の最高中央評議会に直訴する、という非常手段に出た。東部境界社会のテキサス総督府に対する影響力が増していたことの表れと見ることができる。

第5章ではテキサス総督府に残された文書に基づいて、ルイジアナからの移住申請者77人のプロフィールとライフ・ヒストリーを検討した。この集団の人口学的・社会経済的特性について、サンプル数としては少ないながら記述統計的处理を行い、第2章で検討した1793年の人口調査と比較する。続いて情報量の多い典型的な申請者を選び出して個別に検討する。その結果、1793年にはゼロであったアメリカ合衆国出身者の比率が第二期には30%にのぼること、1793年の住民に比べて非牧畜業従事者の比率が著しく高いことが示された。移住申請者の中には、一方においてこれまでルイジアナ社会において指導的立場にあり、アメリカ合衆国の統治を嫌って移住してきた者もあれば、他方において必ずしも移住を目的とせずいわば「カラ申請」を行って密貿易など境界地帯での経済活動に従事したと思われる者もあった。

第6章では、1804～1810年にナコドーチス、トリニダ・デ・サルセド、サビーン川東岸などで行われた5つの人口調査から窺われる人口学的・社会経済的特性と、1793年人口調査の三地域および移住申請者77名のそれを比較した。この時期のテキサス東部ではスペイン領出身者は半数に満たず、それ以外の住民の中ではルイジアナ出身者、アメリカ合衆国出身者、その他ヨーロッパ等出身者がだいたい拮抗しており、1793年以後大きな変化が起こったことがわかった。世帯主男性は独身率が高いが必ずしも年齢は若くないことがわかった。ナコドーチスでもトリニダ・デ・サルセドでも、1世帯ないし2世帯のとびぬけて多くの牛を所有する家族があり、その回りに多数の中小規模の牧畜世帯が集まっていることがわかった。調査によっては有産者の比率が高く、調査者が移民受入政策の成功を強調するために調査対象者を選んでいる疑いがあることがわかった。

終章ではメキシコ独立戦争勃発後、1811年にサン・アントニオで発生し鎮圧されたラス・カサス反乱と、1812～13年にルイジアナ領内ナキトシュでアメリカ人のフィリバスターをも巻きこんで組織され、テキサスに越境襲撃をしかけたグティエレス反乱の検討がなされる。後者の引き起こした混乱と先住民の活動激化により、テキサス東部からはヨーロッパ系住民が東西へ退去していなくなってしまう。しかし、第4～6章でとりあげた1803～1810年の時期のテキサス東部住民は、メキシコ独立後アメリカ合衆国から流入した移住者たちの一部を占めていたに違いなく、後者の民族的・社会経済的特性を推定する上でも一助となる、と著者は強調する。

以上のような構成を備える本論文に対し、審査委員会は、スペイン植民地支配末期のテキサス辺境社会と、アメリカ合衆国のルイジアナ購入がそこにもたらした変化を、一次資料の広汎な読解に基づいて実証した、社会経済史と植民地行政史にまたがる総合的歴史研究として高い水準に達していることを確認した。さらに、とくに次のような点で論文の意

義を評価した。

第一に、本論文が、日本のアメリカ史研究ではほとんど未開拓であった分野で得られた最初のまとまった業績であることである。アメリカの学界では「スパニッシュ・ボーダーランド」研究と呼ばれるこの分野は、カリフォルニアからテキサスにいたる南西部国境地域の歴史を、そこがかつてスペイン領であった時代に遡りスペイン語史料を使って研究するものであり、参入するためにはアメリカ史の知識とスペイン語史料を読みこなす力を兼ね備えている必要がある。この垣根の高い分野に取り組んで博士学位論文にまで仕上げた論文提出者の意欲と根気は特筆するに価する。とりわけメキシコ史を専門とする審査委員からは、メキシコの学界においてもスペイン領・メキシコ領であった時代のテキサスへの関心は薄く新しい業績も少ないので、本論文は貴重な貢献であるとの指摘があった。

第二に、研究方法の手堅さが注目される。本論文の基幹的史料は、テキサス大学ベハル・アーカイヴズが所蔵する、この時期にテキサスへの移住許可を申請した 77 名のルイジアナ住民の身上書だが、すでに先行研究によって利用されている。しかし論文提出者は、所蔵されているすべての身上書を網羅的に数えあげ、記述統計的处理を行い、さらにその前後の時期の人口調査と比較してその人口学的・社会経済的特性を示し、その上で典型的な個々の例について詳述するというきわめて手堅い方法論に立って仕事をしており、そのことでこの集団に対する単なる印象論にとどまらない理解と洞察を示し得ている。とりわけアメリカ史を専門とする審査委員からは、移住申請者の中に、かつてスペイン領ルイジアナの指導的階層に属しており、ルイジアナ購入により新教国アメリカの統治下に入ることをほんとうに忌避して、スペイン領テキサスへの移住を申請した人々がいたという本論文の指摘は、ともすればお国自慢になりがちなアメリカ地方史の伝統からはなかなか出てこない、との指摘がなされた。また、本文で直接に使われていないデータをも見やすく整理した大部の巻末付録は、後続の研究者にとっても高い価値を持つとの指摘がなされた。

第三に、本論文は、ラテンアメリカ植民地時代史研究としても、とりわけ官僚機構の行動様式の研究として大きな意義があり、スペイン植民地の行政運営の実態についての深い理解と洞察に導いてくれるものである。内陸チワワ市の総司令官と、サン・アントニオのテキサス総督府とは、人口は増やしたいが治安悪化は困るというディレンマを共有しながらも、それぞれに立場と思惑があり決して一枚岩ではない。チワワ市の総司令官は決して自分ではテキサス現地に出向こうとせず、ルイジアナからの移住申請者全員の身上書を送らせて自分で審査するという、何ともスペイン植民地官僚らしい方法でこのディレンマを解決しようとする。その結果現地では、ルイジアナ住民が形だけの移住申請をしてそれをアリバイにテキサスに自由に入出入りするという事態が発生する。これがテキサス現地の役人たちのチワワに対する面従腹背を通じて地元の利益を図る姿勢と相まってガバナンスの空洞化が生じる。審査委員の中からは、ともすれば 1811～13 年を境とするテキサスの大混乱はアメリカからの外圧に原因が求められがちだが、スペイン側の支配体制の内部に固有の弱点があり、そこへルイジアナ購入後のストレスがかかったために齟齬と軋轢を生じ、

ついに空洞化と自壊にいたったという著者の立体的な分析が非常に面白いとの指摘があった。

しかし、このように高い水準の研究を達成した本論文にも問題点がないわけではない。審査委員会では、巻末付録にまとめられた史料からすると、集団の人口学的・社会経済的特性についてだけでなく、いま一步踏みこんで個々人のアイデンティティのありかについても何か言えたのではないかと意見が出された。また、本論文はコンベンショナルなアメリカ史の論文でも、コンベンショナルなメキシコ史の論文でもない。それは本論文の美点だがまた危うさでもあり、アメリカ史上の重大事件としてのルイジアナ購入や、フランス領（～1763年）、スペイン領（1763～1803）であった時代のルイジアナ情勢、とりわけ先住民との関係についての理解が、文献目録に引かれた参照文献から判断してもいまひとつ弱い印象がある、との意見が出された。また、小さなサンプルに対する統計的処理の結果を少し断定的に言い表しすぎではないかとする意見、終章には各章の論旨の集約はあってもそれを総括する結論がなかった印象を受けたとする委員もあった。とはいえ、以上述べたような批判は、本論文の学術的な価値を大きく損なうものではなく、問題のうちにはむしろ本研究によって新たに視界に浮上した課題というべきものもある。

以上を総括するに、本論文がアメリカ史、ラテンアメリカ史の分野に大きな貢献をもたらしたことは疑いがない。したがって、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいと認定した。